

## ミシェル・ブレアル - 古代と現代とをつないだ言語学者

比較文法学者ミシェル・ブレアル Michel Bréal (1832 - 1915) の名は、言語学者というより、近代オリンピックの祖といわれるクーベルタン男爵 Pierre de Coubertin (1863 - 1937) に、オリンピック競技としてマラソン (徒競争) を進言した古典語学者として知られている。自軍の勝利を伝えるため 42.195 キロ走って息絶えたギリシャ兵士の話はペルシャ戦争中の有名なエピソードである。第一回オリンピックは 1896 年のアテネ。1900 年の第二回がパリであった。

イギリスのあるグラマースクールで行われていたラグビー競技に接したのち、ホメーロスにつながる古代のオリンピック祭を思ったクーベルタン男爵と、当時の教育の基本を古典の中に見いだしていたブレアルは、大掛かりな国際体育祭を協力して計画し、当時のきな臭いヨーロッパの融和を夢見た。ブレアル『教育の旅』*Excursions pédagogiques* (パリ・アシェット社 1882 年) にはドイツの古典語教育の現状と並んで、体育教育の詳しい報告がある。古代オリンピックは、ホメーロス『イーリアス』第 23 歌で繰り広げられるパトロクロス追悼競技会にその原型を見ることが出来る。

今だに大きな権威をもつアレクシ・ピエロン Alexis Pierron (1814 - 1878) 校訂・注釈によるホメーロス校本 (アシェット社) は、『イーリアス』、『オデュッセイア』とも 1860 年から 70 年代にかけて完成をみた。フランスではそれ以前に詩人ルコント・ド・リール Leconte de Lisle (1818 - 1894) によって仏訳されたホメーロスの二作品が名訳として現在でも版を重ねている。ルコント・ド・リールの率いた詩人グループ「高踏派」Parnassiens という名は、詩神 (mousai) とアポロンの山とされるギリシャのパルナッソス山 Parnassos に由来する。

1983 年に始まった「ホメーロス輪読会」(明治学院大学言語文化研究所) は 2008 年度で 26 年目を終えようとしている。『イーリアス』はすでに終わり、現在『オデュッセイア』の 22 歌に入った。最終巻 24 歌は来年 2009 年度、27 年目で終了の予定である。この会で用いる版はさまざまあるが、主にピエロン版である。現在は毎週一回 40 行以上進む。一歌終えるごとに、現在五人の参加者 (学内外の参加者はこれまで延べ 50 人を越えた - 初級修了者の参加自由) のためにこの版をプリントして配る。このプリント作業もあと二回で終わる。

ドイツ生まれのブレアルは、ロレーヌ地方の町メス Metz で中等教育を終え、パリの高等師範学校に入学。コレージュ・ド・フランスでサンスクリット学者ビュルヌフ Eugène Burnouf (1801-1852) の教えをうけたのち、比較言語学の研鑽のためにベルリンの比較文法学者ボップ Franz Bopp (1791-1867) のもとに赴いた。1833 年からほぼ 20 年かけて刊行された比較言語学の

聖書ともいわれる『印欧語比較文法』(5巻)は、フンボルト Wilhelm von Humboldt (1767-1835)によってベルリン大学に招聘されていたポップの手になるものだが、彼に師事したブレアルはこの著作を仏訳し、比較文法の方法論をフランスに導入した。クーベルタンは、このブレアルがベルリンからパリに戻り、弱冠 32 歳でコレージュ・ド・フランスの教授になる前年、パリ近郊のシュヴルーズ Chevreuse に生まれた。シュヴルーズ溪谷はパスカルを含むジャンセニストたちの拠点の一つ、ポール・ロワイヤル女子修道院があった所である。クーベルタンの生家はこの美しいカトリック的環境にいまも残る。

ブレアルはドイツ南東部・バイエルン地方ランダウ Landau に生まれたフランス系ユダヤ人である。ブレアルの師ポップは 1812 年から 16 年にかけてパリに滞在し、そこでアラビア語、ペルシャ語、ヘブライ語、そしてとくにサンスクリット語(当時のドイツにはサンスクリット語のすぐれた教師がいなかった)を、シェジー Antoine Léonard de Chézy (1773 - 1832) から学んだ。ヨーロッパの大国である独仏両国は当時、古典学でも競い合っていたが、印欧語文法の巨人・ドイツ人ポップの基礎を固めたのはフランスのオリエンタリストたちであった。

19 世紀後半は、グリム兄弟や、ポップ、フランスのレヌアール François Raynaud (1761 - 1836、政治家。晩年、南仏文学の復興を考えた)といった人たちをかつて動かしていたロマン主義熱がすでに薄れていた時代だが、ブレアルの当初の情熱の対象は、神話の起源という、多分にロマン主義的匂いのするものである。この分野に関する論文は『神話・言語学論文集』*Mélanges de Mythologie et de Linguistique* (アシェット社、1877 年)にまとめられている。比較文法のフランスへの紹介者であった彼は、この 19 世紀に急速な発展を遂げたこの学問から次第に離れ、広い意味での言葉の心的分野に興味を移した。

ブレアルはさらに専門のかたわら公的立場において言語行政に携わることになる。ドイツとベルギーの主に中等教育についての前述の著書『教育の旅』は文部省の役人としてドイツ、ベルギーの旧制中学校を視察した際の報告である。それによるとドイツの古典語教育の方法はフランスの中等教育の方法(論文記述方式)よりは明らかに日本の方式(暗記短答式)に近く、明治以来の日本の教育はフランスよりはドイツの方法を取り入れていたことがわかる。また彼は同じ文部官僚の立場で、古典語教師をめざすパリ・ソルボンヌの学生に連続講演し、古典語教育者としての心構えを著書『古典語教育について』*De l'enseignement de langues classiques* (アシェット社 1891 年)にまとめた。

専門の比較文法学の分野で彼は 1868 年、現在に続く「パリ言語学会」を設立し、その事務局長(終身)となった。さらに同年、研究者の研修場所として現在に至る機関「パリ高等実践研究院 Ecole Pratique des Hautes Etudes 略称 EPHE」の設立に加わり教授となる。彼の主な論文発表の場は、「パリ言語学会」の機関誌「言語学会報」*Mémoire de la Société de Linguistique de Paris* (現在は *Bulletin de la Société de Linguistique*) であったが、他に「ギリシャ古典学会年報」*Annuaire de*

*l'Association des Etudes Grecques*、「研究者日報」*Journal des Savants*、「両世界評論」*Revue des Deux Mondes* といった、若いヴァレリーやプルーストといった文学者の読むものにも好んで寄稿した。言語学の時代と言われる 19 世紀後半のフランスの人文系学問の、実際と立案（行政）双方の中心に彼は位置したが、目指した学問の方向は現代の記号論的分野につながるものではなく、古いユマニスト的方向であった。

彼は後に、ドイツのシュライヘル August Schleicher 1821-1868 の、言語を有機物的生体と見なす考え方、あるいは「青年文法学派」と呼ばれたドイツ比較言語学者たちの唱える「音声法則万能主義」の、いわばことばの物質的側面を強調する視点を忌避し、意味論という、ことばの内面的、心理的側面の考察に傾いていったが、これは、彼のことばへの情熱が 19 世紀の前半の思潮に関係していたことを示すものであると思われる。

後半生の仕事の集大成とも言える『意味論試論』*Essai de Sémantique* の初版は 1897 年、彼の多くの著作を出したパリのアシェット社から出版された。「意味論」*sémantique*（英語では *semantics*、北欧圏の一般用語は *semasiologie*）という新しい術語を学界に定着させたこの本に対し、ただちに反応したのは同僚の言語学者ではなく、若いヴァレリー Paul Valéry（1871-1946『メルキュール・ド・フランス』*Mercur de France* XXV 号 1898/1）である。ブレアルは比較文法・言語学の分野を超え、当時の文学的領域に踏み込んでいたのである。

私が用いている『意味論試論』のテキストは、1924 年版のスラットキヌ Slatkine・リプリント版（ジュネーヴ）だが、この版の冒頭には著者の亡き妻アンリエット Henriette への献辞が掲げられている。

ブレアル夫人 Henriette Bamberger はプルースト Marcel Proust（1871-1922。ヴァレリーと同年）の母方のマルグリット叔母 Marguerite Mayer の叔母にあたる。プルーストの母は 1890 年、19 歳になった息子のマルセル（プルースト）宛の手紙で、このブレアル家のことを話題にしている（フィリップ・コルブ Philip Kolb. 『プルースト書簡集』*Correspondance de Marcel Proust*. 1 巻, 157 ページ. パリ、プロン社 1970）。文学士になっても将来が定まらず画家を志望していた息子オーギュスト Auguste Bréal（1875-1938）を心配した父（ブレアル）は、妻の姪であり、プルーストの叔母である マルグリットに手紙を出しているのである。こうしてプルースト家とブレアル家は縁戚関係にあると同時に、プルーストにとってブレアルは、友人（オーギュスト）の父という立場であった。

1892 年、パリ大学に通っていたプルーストは、画家になったオーギュストに手紙を出している（『プルースト書簡集』3 巻、471-472 ページ. 1976）。そのなかに、『オデュッセイア』の魔女キルケーの場面（第 10 歌）からインスピレーションを得た、ボードレールの「旅への誘い」の一節を引用している。

1905年、英語(ラスキン)翻訳を手伝っていた家庭教師マリ・ノードリンジャー Marie Nordlinger にあてた手紙のなかで、34歳のプルーストは、友人の音楽家レイナルド・アーン Reynaldo Hahn が地中海海岸での滞在で『イーリアス』の一場面を思ったことを記している(『プルースト書簡集』5巻327-328ページ,1979)。この作品が「ホメロス翁」個人の作になるのではなく、共同作業によるものらしいと言って嘆くアーンに対しプルーストは、マスネ Jules Massenet (1842 - 1912) が現実の音楽家として現存するように、ホメロスは実際に存在したこと、また『イーリアス』は構成され書かれたもので、朗唱されたものではないというブレアルの当時の説(1905年6月の『パリ評論』*La revue de Paris*に載った)をアーンに示して慰めている。このブレアルの記事は翌年の『ホメロスをよりよく知るために』(アシェット社)のなかの一章「文学史としての問題」(本誌に翻訳)に採録されている。

こうしたことから、プルーストだけでなく当時の知識人は、ホメロス作品を中等教育課程において原文で読まされていたことがわかる。『教育の旅』によれば、当時のドイツのギムナジウム(イギリスのグラマースクールにあたる)では、ホメロスの二作品のうち一方は数年かけて全編、もう一方は部分的に読まれているとあるが、フランスの主なリセ(例えばプルーストやアーンの通ったリセ・コンドルセ)も、それと似た状況であったと思われる。言語学者ブレアルはこうした古典語教育を受けた若い文学者のなかで大きな影響力をもっていた。

1908年6月のストロース夫人宛の手紙(『プルースト書簡集』8巻140ページ,1981)でプルーストは、スノップにすぎない人間がしばしばアカデミー会員になることを嘆き、こうした俗人より、ブトルー Emile Boutroux (1845-1921 哲学者)、ベルクソン Henri Bergson (1859-1941)、マスペロ Gaston Maspéro (1846-1916 エジプト学者)、アルフレッド・クロワゼ Alfred Croiset (1845-1923. 弟は Maurice. 共にギリシャ古典学者として有名) や言語学者ブレアルのほうがはるかにマシだと言っている。プルーストが特に尊敬した学者に、美術史家エミール・マール Emile Mâle (1862-1954) を加える事ができるが、こうした学者に対するプルーストの評価基準は明らかに、彼らの持つ古典の深い教養が必須の条件である。

アメリカ・イリノイ大学のコルブ教授編纂の『プルースト書簡集』にブレアルはしばしば登場する。しかし話題になっているのは全三十巻中、ブレアルがまだ小説家として有名になる前の第一巻(1880 - 1895年)から第十巻(1910 - 1911年)までで、プルーストが『失われた時』にかかりきりになった頃からの手紙に彼についての言及は見あたらない。

『意味論試論』の最終章(26章)「言語・人類を教導するもの」には、「知の活動における言語の役割 - 印欧語優越性の所在」と副題がつけられている。ブレアルは、ドイツ語、英語、フランス語といった印欧語内での言語間に優劣はないとしながら、アフリカの言語や中国語に対す

る印欧語の優越は意識している。彼はこうした長所は印欧語の始めから存在したのではなく、長い時間をかけて抽象化の機能を彫琢してきたことから生じたと考えるのである。この意味でブレアルの言語観は、理性的言語こそ抽象（内省・歴史）的思考の基礎であり、支えるものだとするコンディヤック Etienne de Condillac（1715 -1780）の思想に近い。

こうした思想につらなる彼の言語観は、しかし、時制のように重大なものを印欧語風には明確に言い表すことができないセム語や中国語を、その言語を用いる人種の劣性に結びつけるようなことは決してない。神話学から発した彼は、ある種の人種的偏見を根底にもつ当時の比較宗教学などからは距離をおいていた。彼は、それぞれの言語が、使用する人間集団の精神構造を映したものだと考えた言語ロマンチストのフンボルトとは異なり、むしろ理性的に磨かれてきた言語こそ人類を導くことができると考えるのである。彼の問題は当初から「起源」とその「進化」とに関わるものであり、言語の心理機能の問題ではない。『意味論試論』を言葉の現代的「意味」の問題だけを扱った著作と考えるのは間違いである。言語の内面的部分に彼が目にしたのは、その部分の比較言語学的解明によって起源（つまり人間という「神話」）の問題により強い光があたりと考えたからである。『意味論試論』後尾に付け加えられた「動詞の起源」という論理的な文章は、この書物の目的がまさに「起源（神話）問題」にあったことを示している。

ヴァレリーは、ブレアルが起源の問題を排除したと、次のような言葉で述べている。「ブレアル氏は、（言語有機体説を排除したと同じような理由で）起源という変転する問題を無視した。あらゆる問題において起源は幻想である」（『著作集』 *Oeuvres* 2 巻. 1448 ページ. パリ. ガリマール・プレイヤード版 1960）。このヴァレリーの考えは、「起源の問題は言語学の埒外」という当時の言語学の自己規制の常識に沿っているものだが、この評にブレアルがどのような反応を示したのかはわからない。しかし『意味論試論』の大きな主題は結局、言語変化の心理的原因探求を方法論とした「起源問題」である。古い 19 世紀をひきずる「起源問題」にヴァレリーはほとんど興味がないようで、関心を示しているのはひたすらこの書物の心的、記号論的部分である。ブレアルの数ある関心事の中にはコンディヤック流の記号論的側面はたしかにあり、この側面は彼の弟子となるソシュールに引き継がれていくのだが、ブレアルの真のテーマは「言語」の理性的完成と並行して完成されて行くと思われる人間性そのものにあった。ブレアルが後半生示した青少年の「教育問題」についての強い関心は、こうした肯定的言語観の脈絡でなくては理解できないだろう。

ユダヤ人にフランス市民権獲得を可能にした理念は「人間は生まれながらに自由であり、権利において平等である」という、「革命」のときの人権宣言第一条である。ユダヤ人に政治的権利を与え、奴隷制度を廃止させたグレゴワール神父 Henri Grégoire（1750 - 1831 フランス国教会派）は、当時の危険に満ちた政治活動において、大革命、反革命、ナポレオン帝政、王政復古とめま

ぐしい軌跡を描いて展開したフランス史の激動期を、断頭台に登ることなく生き延びた希有な政治家である。彼はフランスのユダヤ人に大きな夢と希望とを与えたあと、パリ郊外（当時）のヌーイ Neuilly で天寿を全うした。彼の没後四十年、こうして市民権を得て豊かになった階層からプルーストが、このヌーイで誕生する。

七月革命の翌年、フランス在住のユダヤ人の恩人グレゴワール神父の国民的榮譽に包まれた葬儀で追悼演説をしたのは、彼のお蔭で得た公職で雄弁を発揮できるようになったユダヤ人の弁護士アドルフ・クレミュー Adolphe Crémieux（1796-1880）である。国内だけではなく、中近東や当時フランス領北アフリカのユダヤ人解放に力をつくしたアドルフ・クレミューは、プルーストの母方の大叔父にあたり、彼はプルーストが生まれる直前、国民防衛軍政府（1870-1871）の法務大臣であった。彼の没年にはプルーストは9歳になっていた。こうしてユダヤ人はこれまで近づけなかった領域において目覚ましい存在感を示すようになるが、プルーストのこの大叔父はその典型である。彼のパリの家で開かれていたサロンには当時第一級の文学者や政治家、音楽家、女優が集まり、彼はこのサロンの常連であったヴィクトル・ユゴーより先に第三共和政による国民葬の榮譽を受けた。

言語の力を裁きの場において発揮する職業である弁護士にたいし、言語の本質を解明するのが言語学者である。長い間、兵士として戦うことも、聖職者として祈ることも、農民として土地に働きかけることも許されなかったユダヤ人、商業・金融のような記号的経済活動に従事することは許されていたものの、記号の中の記号である言葉の力を公的に行使することを封じられてきたユダヤ人には、言語権力行使への抑えきれない欲求と、言葉の謎に対する満たされない好奇心があったはずだ。こうした若い知的ユダヤ人の欲求を満たす職業への接近を容易にしたのはグレゴワール神父であり、教育の分野で強い影響力を持っていたのがブレアルであった。19世紀後半から現在に至るまで、フランスにかぎらず世界でユダヤ人のすぐれた言語学者が輩出している。

『失われた時を求めて』は言語学的面白さに満ちている。コンブレの司祭は地名の成り立ちにくわしく、ときにはその語源についての長広舌で周囲の人を辟易させるのである。小説に載せるにはあまりに専門的で無謀とも思える量のこの種の博識は、「ソドムとゴモラ」の巻、あるサロンでのブリショ教授による地名の語源の開陳のなかに見られる。プルーストはなぜあのように小説の本筋から語源の脇道に反れることがあったのだろうか。ケルト語学者のヴァンドリエス Joseph Vendryes（1875-1960）によればこのブリショ教授のモデルは、ブロシヤール Brochard という名の、いささかさえない古代哲学の教授である。ヴァンドリエスは『失われた時』における地名の語源探求の小説的意義を次のように説明している。「小説の中で語源探求に場所をあたえることによりプルーストの意図は、教養を鼻にかけている人たちの間にはびこっている奇癖を描写すること以外のものではなかったのではないか」（「マルセル・プルーストと固有名詞」『エド

モン・ユグ論文集』 *Mélanges Edmond Huguet* 122. ページ. パリ 1940)。この学術的知識の開陳は、実際当時の社会的知識人のアホらしさを映したものにすぎないのだろうか？

『失われた時を求めて』の作者は個々の登場人物の話し方や用語に対してほとんどマニアックな興味を示している。出会いの初めは星雲 *nébuleuse* のように、定かには認識できない乙女たち *jeunes filles* のそれぞれが、次第に個別的輪郭をもち視覚的識別が可能になっていくなかで、『失われた時』の作者は言葉による判別も試みる。「乙女たち」の一人で、この巻の主人公であるアルベルチヌが、午後 *après-midi* という標準的な表現ではなく、田舎的表現である *tantôt* を用いるのは、彼女が首都パリではなく、フランスの古い地方の出であることを主張しているのではないか。冠詞の女性形 *une* を [yn] ではなく、農婦のように *eun* [œn] と古めかしく発音するゲルマント公爵夫人は、田舎の人間とのふれあいの多い古い貴族は、都会風ではなく農民と同じような話し方をすることを人に知らせるためではないのか。地方(南仏?)出の小間使いセレストは、鳥のような不格好な髪をした主人公に向かって思わず、*Pauvre ploumissou* (「羽毛ちゃん」とでもいう意味)!と南仏語らしき地方語を用いる(「ソドムとゴモラ」)。南仏語はフランス語の方言ではなく、中世において北仏語よりはるかに優越した立場にあったことを彼女たちは知らない。また、女中フランソワーズが *chercher, apporter d'eau* (水をとりに行く、もってくる) というひなびた言い方をして主人階級のフランス語 (*chercher, apporter de l'eau*) のブルジョワ的、教科書的な部分冠詞を無視するとき、こうすることで、「フランス」の本当の主人階級は、出自はともかくも教育を受けた新しい成金階級 *rastaquouères* ではなく、古い土地に根を張る自分たちなのだ、ということは無意識に確認しているのではないのか。プルーストの属する階層がそのような古い「フランス」に属していないことは確かなのである。

フランソワーズの用いる庶民のフランス語は、バルベック・グランドホテルで万事を取り仕切るルーマニア出身の執事のしゃべる誤用に満ちたフランス語とは本質的に違っている。前者の用いる表現こそ、プルーストの母方の「種族」がその成立に加わることでできなかった「古いフランス」の言語変化の過程に見られる由緒ある表現なのである。

フランスの古い地名の成立にも、事後フランスに移住してきたプルーストの「種族」は関わりがなかった。こうしてみると『失われた時』はプルーストという外側の人間の追求した「フランス研究」なのではないか。アンドレ・ヴィアル *André Vial* の小論には、プルーストの真の不安は自分の属する種族に関するものであったという見解が示されている(『プルースト』 *Proust* パリ・ニゼ社 1971)。

作者はまた、唯一の人に多数の名が対応しうることを知っていく。シャルリュス男爵は別名、ブラバン公爵、モンタルジ公、オレロン、カランシィ、ヴィアレヅジョ、デュヌ大公でもある。また唯一の名が多数の形に分かれ、それぞれ違った実体に対応しうることも知る。 *St Hilaire, St*

Illiers, St Héliers, St Ylie といった聖人名あるいは地名が、すべて Sanctus Hilarius という一つの名から発して全国に散らばったり、教会手伝い女ユーラリ (Eulalie) の守護聖女 Sancta Eulalia がブルゴーニュ地方では St Eloï と男子聖人名になっていることを知って驚くのである (『スワン家の方』)。土地の固有性から必然的に生じたこの言語地理学的遺跡は、語源研究に多くの知見をもたらした。スイス人ジュール・ジリエロン Jules Gilliéron (1854-1926) の創始になるこの土俗的固有の視点の専門化は、ブレアルの時間的普遍的観点とはまったく異なるものであるが、ユダヤ的普遍性よりむしろ、フランス的固有性に惹かれていた当時のプルースト (『スワン家の方』の二部「土地の名前」) は、その興味を満たすためソルボンヌの語源学者の講義を聴講していたことが知られている。

自分がどうしても同定することのできなかつたこの古いフランス人 (ガリア人としての女中フランソワーズ、フランク族としてのゲルマント公爵夫人) の本質を彼は知りたかつたのだ。プルーストの小説の解釈を豊かにするためには、ソシュール Ferdinand de Saussure (1957- 1913) やドゥルーズの記号的観点の外、ブレアルの『意味論』の視点、また一つの原型がさまざまな形を取りうるという、ジリエロンの言語地理学的展望も有効であるように思える。言語学者の読むプルースト『失われた時を求めて』はあってよい。

ソシュールの『講義』がジュネーヴの弟子によって編集出版されたのは師没後の 1916 年。また『失われた時』の最初の巻『スワン家の方』の出版はソシュールの没した 1913 年である。スイスは戦乱から免れていたが、『失われた時』のフランスでの出版の継続は戦争の影響を受け、二巻目の『花咲く乙女たち』(1919 年のゴンクール賞) が出たのは戦争後一年経った 1919 年である。戦争のあいだにプルーストは刊行予定の原稿に膨大な量を書き加えた。『講義』の決定版の出版はプルーストの没年の 1922 年である。『失われた時』は完成していた。

ブレアルの功績のなかでおそらく最も恩寵にみちたものは、ソシュールの天才を見抜き、ユダヤ人でもない 20 代前半の若者を 1881 年、パリの実践高等研究院 (EPHE) の自分の後任に据えたことである。当時のソシュールはライプチヒで出した『印欧語母音の原始体系』(1879) に関する比較言語学論文で一躍有名になったが、ドイツの比較文法学者にはこの業績を批判するものも多く、嫌気がさした彼は 1880 年、ライプチヒからパリに移り、EPHE でブレアルの比較文法の講義をうけることになった。『講義』に通じる記号論的観点は、具体的にその道筋をたどることは難しいにしても、ライプチヒ時代の教えとは違う、ブレアルの社会的・心理的『意味論』の影響があることは間違いない。ソシュールは 1881 年に『サンスクリット語属格の独立的用法について』で博士号をとり、ブレアルの後任者となった。

ブレアルはソシュールを印欧比較文法学者として認めたのであって、後々『講義』で明らかに



なる記号論的側面を評価したのではない。ブレアルは二十歳をわずかに越えただけのソシュールの『印欧語母音の原始体系』に示された比較文法学者としての力量を高く評価したのであった。ブレアルの、コレージュ・ド・フランスへの推挽にもかかわらず、ソシュールがスイスに去ったのは、古いプロテスタント貴族であり代々学者の家柄のソシュールが、国籍をフランスに移す決心がつかなかったからなどと言われているが、真相はおそらくそうしたものではないのではないだろう。ここはその真相を追究する場ではないが、一つだけ言えることは、ソシュールが去ったのちブレアルの後を襲ったメイエ Antoine Meillet (1866-1936) が、基本的にはブレアルの比較文法分野を守り発展させたのに対し、ジュネーヴに去ったソシュールは比較文法から遠ざかり、ラングとパロール、通時性と共時性、システム、音韻論、言語記号の恣意性、またアナグラム研究（これはソシュールの何を示すものか？）といった、現代の文学理論の根幹をなす言語概念の規定の試みに移っていったことである。現代の構造主義、セミオロジー、認知論と言った学問はソシュールの新しい分野から発したとも言えるが、若いソシュールはフランスのブレアルに受け入れられてはじめてこうした方向に滑って行くことができ、その方向を現代につなぐことができた。

言語学者ブレアルの持っていた二つの方向性、つまり古典学を基盤にした比較文法と文学は、天才ソシュールによって、より豊穡なものを生み出すいくつかの方法論に細分化されたが、現代はその細分化された「専門」が必ずしも人文学を総合的に豊かにする装置ではなくなっているように見える。これはブレアルが体現していた総合的学問のなかの記号学的分野が異常な発展を上げる一方で、古くからの文献学、古典語学がないがしろにされ始めたからではないだろうか。

文学者プーレストにはすぐれた言語学者の持つセンスがあり、その文章は言語学的探索の宝庫である。プーレストの文章の面白さを分析できない言語学、そこから言葉の真理を抽出できない言語学はえせ言語学であると私は言いたい。

言語学者バンヴェニストやヤコブソンの論は、その文学性こそ彼らの言語論を説得力のあるものにしてている。ドゥルーズやバルト、ジュネットの文学論は双方のエレガンスを備えている。ブレアルの仕事にはこうした文法と文学との好ましい原初的融合があった。

(初出『言語文化』26号 明治学院大学2009年3月)